

「こんなん」 しています。

わだいのつじゆ

皆地笠

皆地笠という美しい笠に出会いました。

熊野山村のむかしの労働と生活を調べるために本宮町四村の旧村地区に行っていました。熊野川支流四村川の流域に位置する四村は明治中期に地域内の11の村々が合併してでき、昭和31年に近隣の村と合併し本宮町になりました。江戸時代に編さんされた紀伊続風土記には「田畑少なく谷狭く、みな寒村」と記述されています。険しく深い山塊に阻ま

れた村も多く、明治時代には小学校をどこに設置するかについて、子どもの通学困難につながるなど、お上を巻き込んだの村どおしの敵しい対立が起きたり、戦後になってもいつまでも電気が点かない村をどうとう皆で捨てた、という廃村まで、歴史の断片はこの地の敵しい自然と暮らしを語っています。しかし、それらのエピソードからは辺境で暮らす人々が子どもや地域にこだわった自尊心と気骨を感じることもできます。

皆地笠とは、四村地域の皆地で作られている、

貴と賤



湯の峰温泉

イトしてすばらしいかぶり心地。ヒノキの編み込みは水にも強く風雨をしのぐ機能性もあります。

かつては地区内に何軒も工房があり、縁の編み込み、桜の皮や竹

熊野詣のイメージ写真でよく見るような参詣人がかぶっている笠です。熊野に隠れ住んだ平家の落人がつくり、熊野詣の人々が愛用したといわれています。現在の唯一の製作者である芝さんの工房を訪ねました。

笠を被ってみましたが、熊野産のヒノキをテープ状に薄く削り、それを編み込んで作る笠は、羽の用に軽く、涼しく、頭を入れる笠台もよくフ

貴賤の道

湯の峰温泉は、古の人々が熊野詣の途中で、本宮大社を目前に身体を清め旅の疲れを癒した湯垢離場(ゆごりば)。小栗判官の伝説では、地獄からむごたらしい餓鬼阿弥の姿でこの世に戻った小栗が、湯の峰の湯に浸かり元の若々しい姿に蘇生したとされています。

宿泊した民宿のご主人の安井理夫さんは小栗判官の研究家ですが、彼によると熊野古道には、小栗街道と呼ばれるいくつかの裏街道があり、それは重病の小栗判官が蘇生を求めて通ったとされる道とのこと。実際に身体の不自由な人や病弱者が人目を避け熊野をめざした道だという学説もあります。それゆえ、小栗街道は「貴と賤の道」だとしています。

来世の幸福を願う熊野

をめざした上皇や貴族、同じく靈験を求め、不自由な身体を引きずるよう
に苦痛に耐え、血を流し
這いながらも険しい山々
を越えた病氣や弱者の
人々。貴さも賤しくもす
べての人々を受け入れた
地、そこが熊野だったの
です。

芝さんが丁寧に編み出す皆地笠は、元々貴賤笠(きせんぼ)と呼ばれていました。貴も賤も、身分に関係なく誰もが被る笠という意味です。

言葉が生み出された背景と熊野の山村のふところの深さに想いを馳せずにはいられませんでした。



皆地笠

プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。